

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究目的	2
III	研究仮説	2
IV	研究構想図	2
V	研究内容	3
	1 社会科で育成する資質・能力について	
	2 社会科の見方・考え方について	
	3 社会を読み解く力について	
	4 単元を貫く問いの工夫について	
	5 個別最適な学びについて	
VI	授業実践	5
	1 授業実践『現在に続く日本と世界』	
	2 授業実践『現代社会をとらえる枠組み』	
	3 授業実践『日本国憲法 基本的人権の尊重』	
	4 授業実践『地方自治と私たち』	
VII	結果と考察	12
	1 結果	
	2 考察	
VIII	成果と課題	17
	1 成果	
	2 課題	
IX	参考文献	18

<中学校 社会科>

社会を読み解く力を育成する社会科の授業改善

～自ら問いを立て追究していく活動を通して～

宮古島市立北中学校 教諭 池間 強志

I テーマ設定の理由

中央教育審議会答申（令和3年1月26日付）のなかで、「人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things(IoT)、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものがこれまでとは『非連続』と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつある。」と述べられている。この文言通りに社会は変化し続けており、それに伴い次世代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力も大きく変化している。

予測困難な社会において、自分の良さや可能性を伸ばし、多様な他者と協働しながら社会の変化を乗り越え、社会の形成者として、ウェルビーイングな社会を実現していくためには、学習指導要領総則社会科編で目指す資質・能力である①生きて働く知識・技能、②未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力、③学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の育成が必要不可欠である。また、①～③を育成するためには、生徒の主体的な学びが重要となる。

これまでの私自身の授業実践を顧みると、宮古島で生まれ育っている生徒の多くが社会的事象と日常生活の乖離が大きく、自分事として学習課題や問いを受け止められず、主体的に活動すること自体が難しいのではと感じられる場面が多くあった。つまり、教師が与えた課題や問いで行われている授業は、主体的な学びに結びつきにくいと考えられる。そこで私は、本研究において「社会を読み解く力」の育成を目指していく。「社会を読み解く力」を働かせ、問いを追究することで、新たな問いが生まれ、それを追究し、また新たな問いが生まれる。そのようなサイクルを繰り返すことで、予測できない場面に直面した時に、自ら問いを持ち、知識・技能を活用しながら課題解決に向けて行動できる力が身に付いていくと考える。つまり、「社会を読み解く力」を育成するためには、主体的な学びでなければならないということである。

生徒一人一人が予測困難な社会の形成者として「社会を読み解く力」を発揮し、ウェルビーイングな社会の実現のために、自分自身にできることを主体的に考えて行動できる生徒を育成したいと考え、本テーマを設定した。

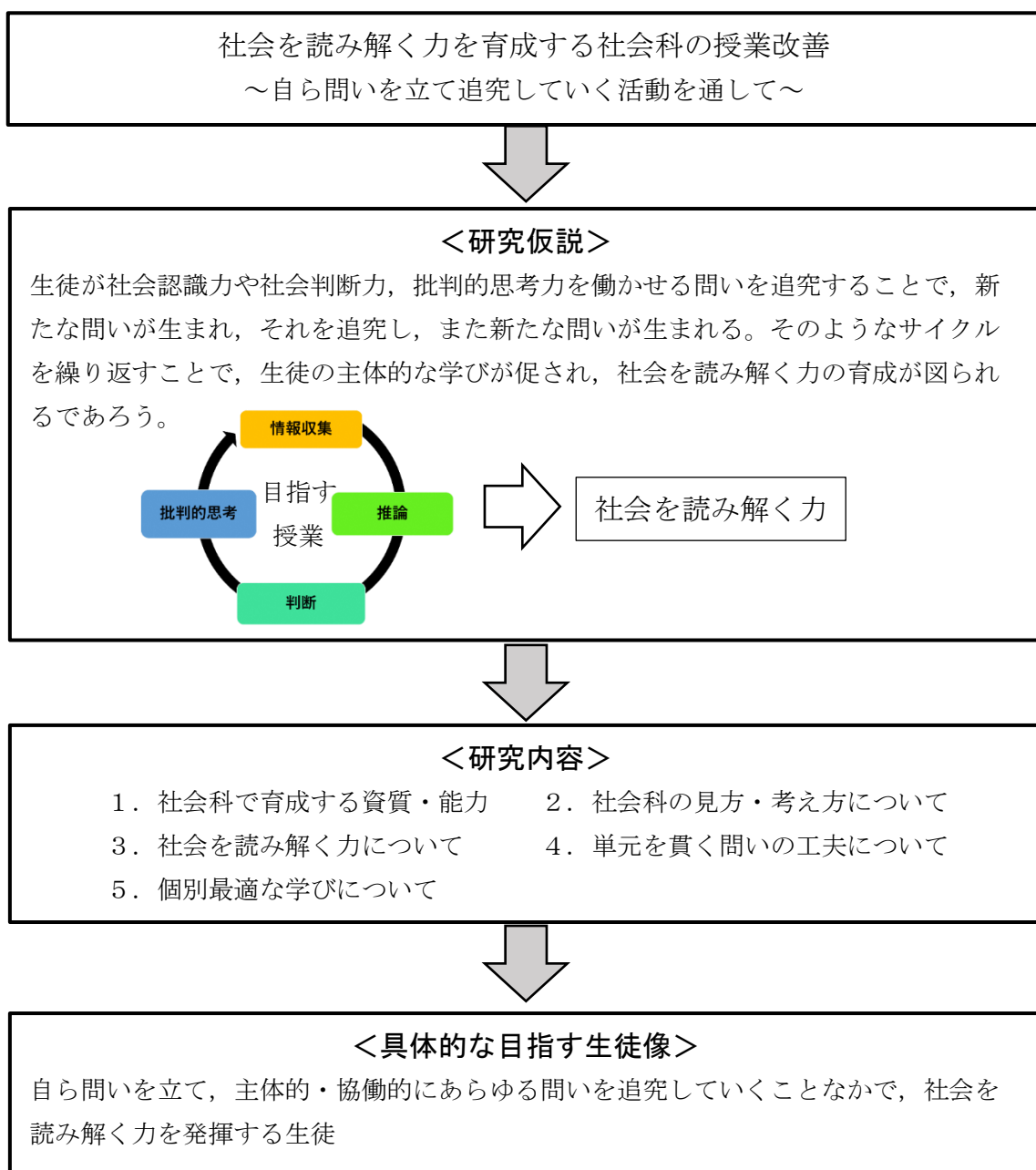
Ⅱ 研究目的

生徒が自ら問いを立て追求していく授業が、生徒の主体的な活動を促し、社会を読み解く力の育成に効果的であるかを検証する。

Ⅲ 研究仮説

生徒が社会認識力や社会判断力、批判的思考力を働かせる問いを追究することで、新たな問いが生まれ、それを追究し、また新たな問いが生まれる。そのようなサイクルを繰り返すことで、生徒の主体的な学びが促され、社会を読み解く力の育成が図られるであろう。

Ⅳ 研究構想図



V 研究内容

1 社会科で育成する資質・能力について

学習指導要領の改訂では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等の学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるよう、全ての教科等の目標及び内容が、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性」の三つの柱で再整理された。

社会科は三つの柱に沿った「公民としての資質・能力」を育成することを目指している。具体的な資質・能力をとしては、「知識・技能」については、社会的事象等に関する理解などを図るための知識と社会的事象等について調べまとめる技能として、「思考力・判断力・表現力等」については、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察する力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想する力や、考察したことや構想したことを説明する力、それらを基に議論する力として、また、「学びに向かう力・人間性等」については、主体的に学習に取り組む態度と、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される自覚や愛情などがある。

2 社会科の見方・考え方について

「社会的な見方・考え方」は、課題を追究したり解決する活動において、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法である。つまり、公民としての資質・能力の育成全体に関わるものであると考えられ、特に「思考力・判断力・表現力等」の育成に当たって重要な役割を果たすものであると捉えられる。

3 社会を読み解く力について

テーマ設定の理由で前述したように、中教審答申でも「社会の在り方そのものがこれまでとは『非連続』と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつある」と述べられる程、変化の激しい社会、先を見通すことが難しい社会への対応が教育的課題の一つとなっている。そのような社会をたくましく生き抜いていくために必要な力が社会を読み解く力である。社会を読み解く力とは、社会認識力（情報収集）、社会認識力（推論）、社会判断力、批判的思考力を合わせた総称で、子供たちが主体的にあらゆる問いを追究していくことで発揮する力やそのような学習によって育つ力を指す。社会を読み解く力の詳しい内容は表の通りである。

<社会を読み解く力>

社会認識力（情報収集）	資料から必要な情報を集めて読み取る力
社会認識力（推論）	社会的事象の相互関係や意味・意義、特を説明する力
社会判断力	社会的事象を評価的に判断したり、問題面において望ましい行為や政策を模範にとづいて選択する力
批判的思考力	知識等に内在する価値・規準・立場を吟味したり、その組み立ての論理や提示の方を吟味する力

参考：これからの社会科教育はどうあるべきか（東洋館出版社）

4 単元を貫く問いの工夫について

問いを作成していく上で、そもそも教師自身が疑問に思えない課題（問い）に対して指導意欲を高めることはできない。問いが生まれる場面は、未知に出会ったときや既知とのズレを感じたときが多いのではないだろうか。それは大人も子供も同じである。教師が問いを生み出す感覚を持って、視点を変えながら物事を考えていくことが重要である。

子供たちが主体的に学ぶ授業をするためには、分かったつもりでいる子供たちに、本物の理解を届けるためには、子供をハッとさせ、本気にさせる「問い」が必要である。

問いの設定の仕方には、「部分→全体型」、「なぜ型＋多様な予想」、「価値や意志を問うサブテーマ設定」、「どうすべきか→時間軸で調べる」などの方法がある。特に、「どうすべきか→時間軸で調べる」問いは、時間軸を追って問いを追究することで「過去や現在を知り未来を考える」という授業展開がやりやすい。単元を貫く問いを設定する方法として一番適している設定の仕方だと考える。

単元を貫く問いは、「正解」ではなく、「最適解」「納得解」を求めるように設定する。あらかじめ正解のない問題解決に取り組むことで、集団の中で個が埋もれてしまうことを防ぎ、他者と協働することで異なる考えが組み合わさり、よりよい「最適解」「納得解」を求め続けていく学びが展開されていく。その中で、社会の一員としてよりよい社会づくりに主体的に参画する態度の育成も図られる。

5 個別最適な学びについて

個別最適な学びとは、「個に応じた指導」を学習者の視点から整理した概念である。個別最適な学びの背景には、発達障害や不登校、経済的困難、海外にルーツを持つ子供の増加など、子供の多様性が拡大していることが挙げられる。それだけでなく、どの子供もその子供ならではの、独自の要求や都合を抱えている。そのことから、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する個別最適な学びは非常に重要である。

個別最適な学びは、「指導の個別化」、「学習の個性化」の二つ視点から構成されている。

「指導の個別化」は、基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、支援が必要な子供に、より重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現し、特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供を行うことなどが必要であるという考え方である。「学習の個性化」は、基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身の学習が最適となるよう調整できるようにすることである。

VI 授業実践

第1回 検証授業

(1) 単元：「第6章 現在に続く日本と世界」(歴史的分野)

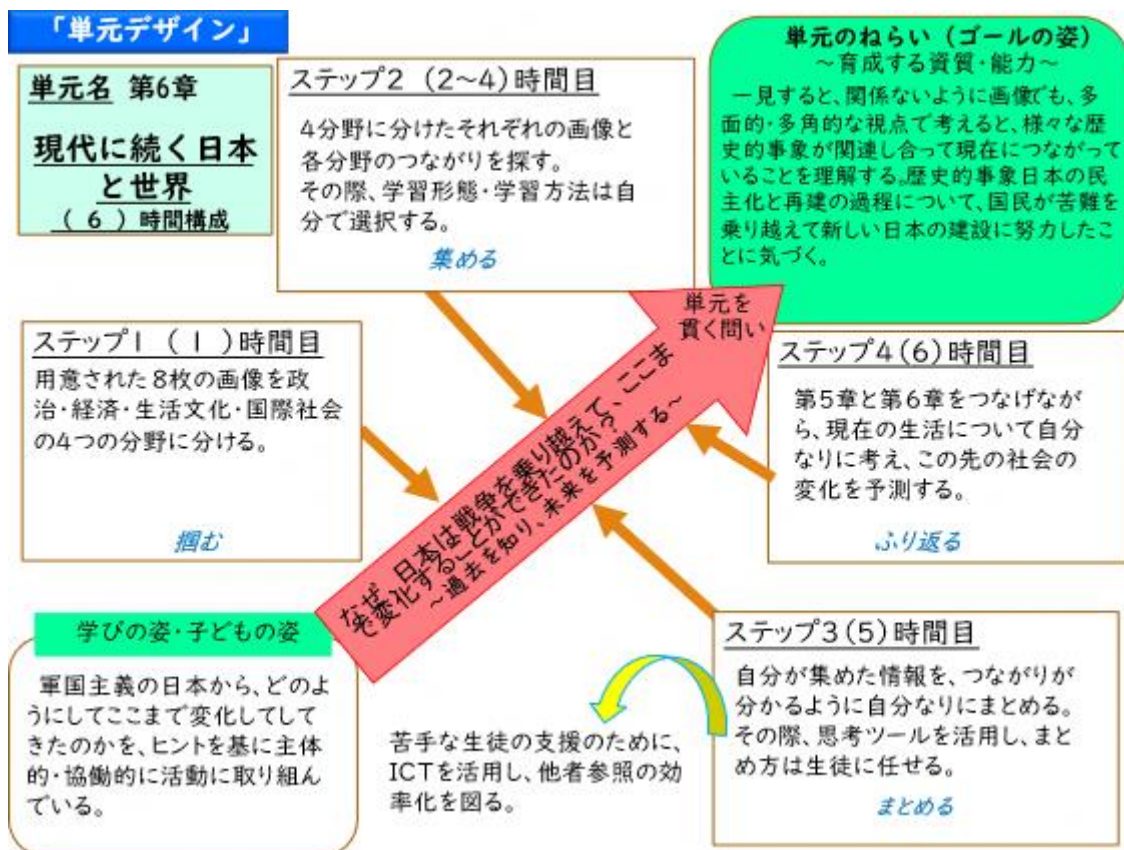
(2) 単元を貫く問い

「なぜ、日本は戦争を乗り越えて、ここまで変化することができたのか？」

(3) 単元目標

- ①戦後の民主化と再建の過程を理解することができる【知・技】
- ②現在の生活を多面的・多角的に捉え、大きく関わっている歴史的事象に辿り着くまでの流れを自分なりに表現することができる。また、歴史的事象が相互に関連し合っていることを表現することができる。【思・判・表】
- ③学習形態や学習方法を自ら選択し、他者参照により他者の考えと自分の考えを比較するなどして自己の学習を調整することができる。【学・人】

(4) 単元プランシート



第2回 検証授業

(1) 単元：「第2章 現代社会をとらえる枠組み」(公民的分野)

(2) 単元を貫く問い

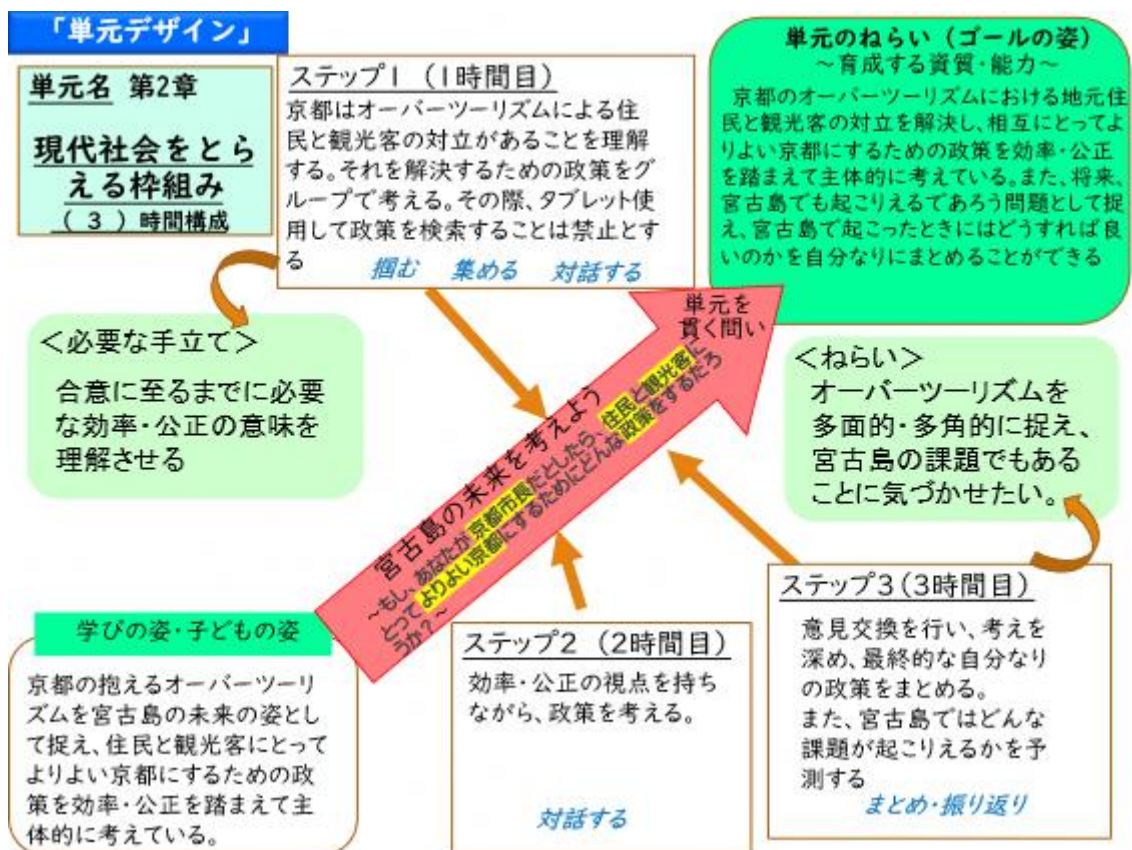
「宮古島の未来を考えよう」

～もし、あなたが京都市長だとしたら、住民と観光客にとってよりよい京都にするために
どんな政策をするだろうか?～

(3) 単元目標

- ①対立から合意に至るために、効率と公正の考え方を理解する【知・技】
- ②効率と公正の考え方を生かして、問題を解決して住民と観光客が互いに合意に至る政策を自分なりに考え、その根拠を示しながら表現している。【思・判・表】
- ③学習形態や学習方法を自ら選択し、他者参照により他者の考えと自分の考えを比較するなどして自己の学習を調整することができる。【学・人】

(4) 単元プランシート



第3回 検証授業

(1) 単元：「第1章 日本国憲法 第2節 基本的人権の尊重」(公民的分野)

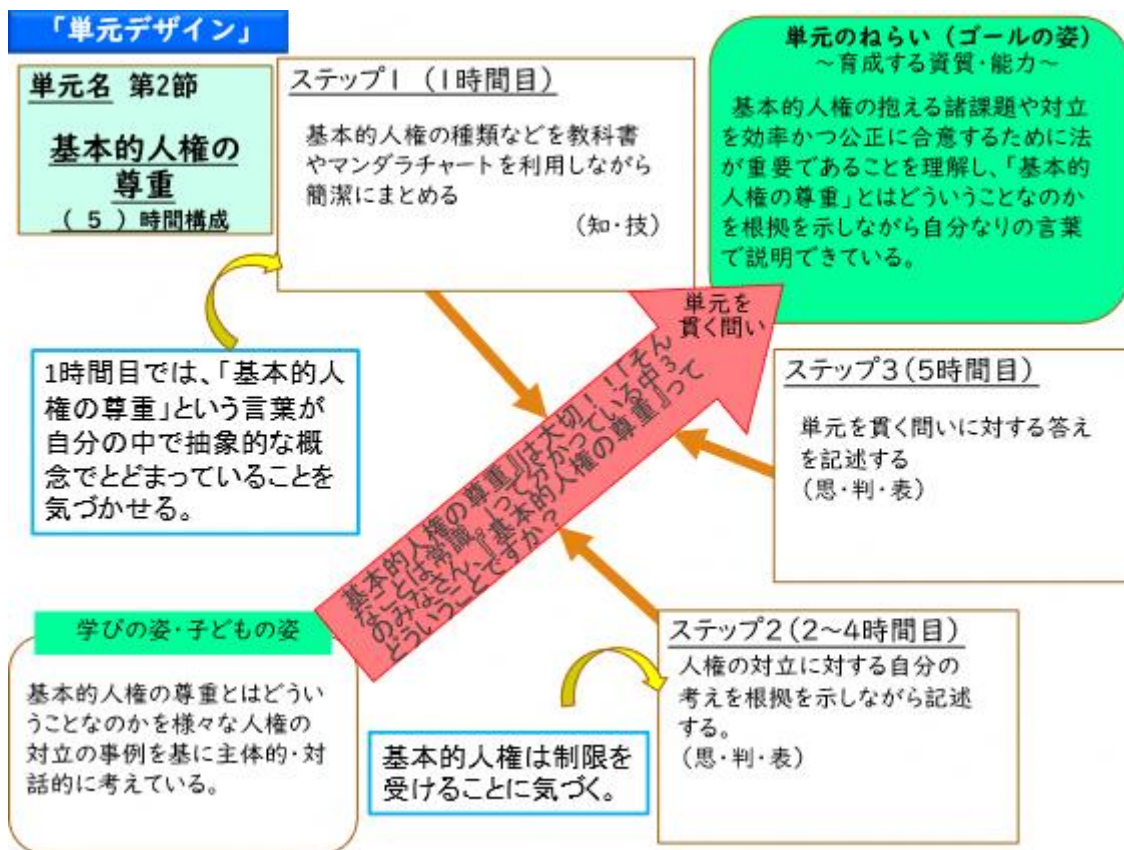
(2) 単元を貫く問い

「基本的人権の尊重は大切！」「そんなことは常識。」って分かっている中3のみなさん、
基本的人権を尊重ってどういうことですか？」

(3) 単元目標

- ①基本的人権について基礎的・基本的な知識を身に付けることができる【知・技】
- ②人権をめぐる諸課題について、日本国憲法や法律などを根拠に自分なりの考えをまとめて表現している【思・判・表】
- ③学習形態や学習方法を自ら選択し、他者参照により他者の考えと自分の考えを比較するなどして自己の学習を調整することができる【学・人】

(4) 単元プランシート



第3学年 社会科学学習指導案

令和6年9月10日(火) 5校時

3年3組 計28名

授業者 池間 強志

1. 単元名

第2部 政治 第2章 民主政治 第3節「地方自治と私たち」【帝国書院】

2. 単元目標

【知識・技能】

- ・地方自治の基本的な考え方や政治の仕組み、住民の権利について理解する。

【思考力・判断力・表現力】

- ・宮古島の持続可能な発展のために必要な政策について、地方自治の考え方に着目しながら、財政と関連付けて多面的・多角的に考察、構想し、表現する。

【学びに向かう力・人間性】

- ・主体的に政治に参加し、宮古島の発展に寄与しようとする自覚を深め、他者と協働しながら主体的に学習に取り組んでいる。

3. 単元を貫く問い

「私がずっと住みたい宮古島のキャッチコピーとは？」

4. 単元について

(1) 教材観

本単元は、『中学校学習指導要領社会編』公民的分野 大項目C 私たちと政治 中項目(2) 民主政治と政治参加 ア(エ) イ(ア)の内容から設定した単元である。【中学校学習指導要領社会編 P154】

本単元は、地方自治の考え方に着目して、課題を追究したり解決する活動を通して、宮古島の発展に寄与しようとする自覚を深め、主体的に政治に参加することについて多面的・多角的に考察、構想し、表現する力の育成を目指している。

本単元は、生徒の実生活に関わる社会的事象から考察する問いを設定しやすいため、政治に対する関心を高め、主権者であるという自覚を深めることが期待できる単元である。

(2) 生徒観

本校は全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の結果から、主体的な学びに関連する項目と協働的な学びに関連する項目において、全国、県、市の平均を上回っており、主体的・協働

的な学びに安心して取り組める支持的風土が醸成されている学級が多いことが分かる。実際、本学級の日常の授業においては、互いに質問し合う姿や意見交換をする姿、男女関係なく協力しあう姿など、協働的な学びの場面が多く見られる。また、他者の考えと自分の考えを比較する姿や粘り強く自分なりの意見を構築する姿、学習形態・学習方法を自己決定する姿などの主体的に学ぶ場面も見られる。

しかし、「目的に応じて、情報を読み取る力」に課題があり、課題解決に必要な情報をグラフや資料から読み取り、根拠を示しながら論理的に説明する活動が苦手だと考えられる。

（３）指導観

本単元では、上記の教材観及び生徒観を踏まえ、生徒の主体的な学びと協働的な学びを生かし、生徒が問いを生み出しながら活動する授業を目指している。

主体的な学びを生かすことについては、まず、宮古島に関連する単元を貫く問いを立てることで、自分事として授業を捉え、意欲的な活動につなげたい。また、単元を貫く問いを誰の答えでも正解であり、不正解でもあるように設定し、学力に関係なく自分なりの最適解や納得解を思考・判断・表現できるように工夫している。次に、学習形態や学習方法、学習用具を生徒に自己決定させることで、個別最適な学びを促進させ、自己調整しながら学習できる環境を整える。

協働的な学びを生かすことについては、まず、教師の一斉授業や一斉指示の時間をできるだけ削ることである。それにより、教室を自由に学べる空間にし、自分の行きたいときに誰にでも聞きに行ける時間をできるだけ長くする。次に他者参照の効率化である。他者の意見との比較、統合が深い学びへとつながっていくため、ICTを活用し、他者の意見をいつでも聞ける・見られる状況を作り深い学びにつなげていく。

生徒に主体的な活動をさせる上で重要なのが、机間指導による声かけである。机間指導で生徒のつぶやきを拾い、意見を全体に共有したり、生徒の考えを揺さぶる声かけによって新たな問いを生み出さなければならない。また、積極的な机間指導により、個別な支援が必要な生徒への支援も不可欠である。

５．研究テーマとのつながり

「社会を読み解く力を育成する社会科の授業改善」

～自ら問いを立て追究していく活動を通して～

研究テーマである「社会を読み解く力」とは、子供たちが主体的にあらゆる問いを追究していくことで発揮する力やそのような学習によって育つ力である。本単元で設定した単元を貫く問いは、情報収集・推論・判断・批判的思考と社会を読み解く力を生かして活動するように設定している。「宮古島の現状や課題を知る（情報収集）→課題解決のためにどんな政策が必要かを予測する（推論）→政策のための財源の調整を行う（判断）」という流れの中に、本当にこの政策で良いのか、財源は確保できるのか、予算を削減された項目は成り立つのかななどの批判的思考を促すことで、新たな問いが生まれ、その問いを解決するために、

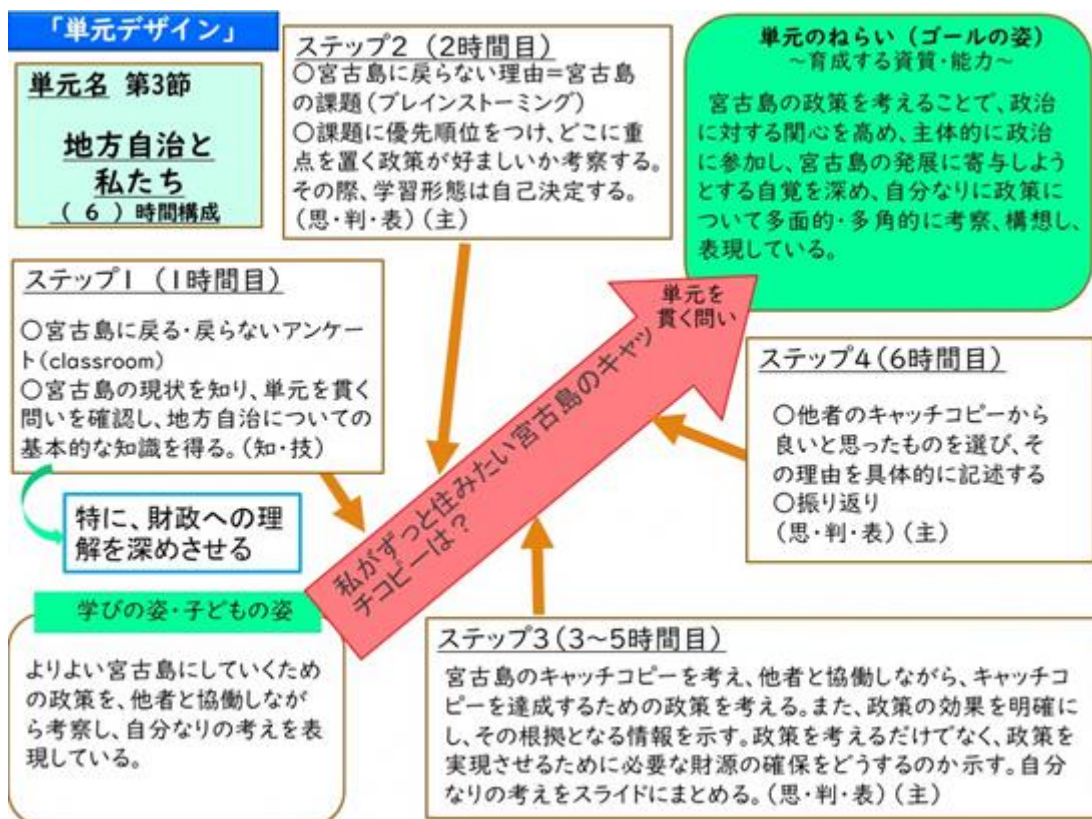
「情報収集→推論→判断」という過程へとつながる。この過程を生徒が何回も行うことで社会を読み解く力を育成でき、研究テーマに迫っていきける単元構成となっている。

6. 単元の評価規準

(1) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①地方自治の基本的な考え方や政治の仕組み、住民の権利について理解している。	①宮古島の持続可能な発展のために必要な政策を具体的に考察している。 ②財政と関連付けて、政策について判断している。 ③自分の考えの根拠を示しながらスライドにまとめている。	①宮古島の発展のために、自分にできることはないか考えている。 ②考えを深めるために、他者と協働しながら活動に取り組んでいる。 ③学習の形態や学習方法、学習用具を自ら選択し、自分に合った学習をしている。

7. 単元デザイン



8. 本時の学習【3/6】

(1) 目標

○宮古島のキャッチコピーを考え、他者と協働しながらキャッチコピーを実現するための政策を考える。

(2) 授業の工夫・手立て

①学習の形態や学習方法，学習用具を自己決定させ，主体的な学びを促す。

②ICT を活用し，他者参照の効率化を図る。

③机間指導を積極的に行い，考えを揺さぶる声かけを通して，批判的思考を促す。

(3) 授業展開

	学習内容	指導上の留意点
導入 3分	1. 単元を貫く問いの確認	●できるだけ簡潔に終わらせ，生徒の活動の時間を長くする。
	あなたがずっと住みたい宮古島のキャッチコピーとは？	
	2. 活動の確認	
展開 42分	3. 前時の活動で決定した課題の優先順位をもとに，キャッチコピーを考え，キャッチコピーを実現するために必要となる政策を考える。	●学習の形態や学習方法，学習用具は生徒が自分で選択し，学習を進める。 ●机間指導を積極的に行うが，必要最低限にとどめ，答えとなるような発言はしないように気をつける。 ●活動が進まない生徒には，選択肢を増やすための助言を行い，生徒に自己決定させて学習に取り組ませる。
まとめ 5分	4. 次時の確認	●進捗状況を振り返らせ，見通しをもてるようにする。

(4) 「概ね満足できる」状況の具体例

概ね満足できる状況(B)	生徒の学習状況	具体的な姿
・宮古島の持続可能な発展のために必要な政策を考察している。 ・政策を実現するために，財政と関連付けて判断している。	・政策を考察し，政策を実現させるために必要な財源の確保について，自分なりの考えを表現している。	・ICT を活用しながら，他者と協働することで自分の考えを深めようとしている。

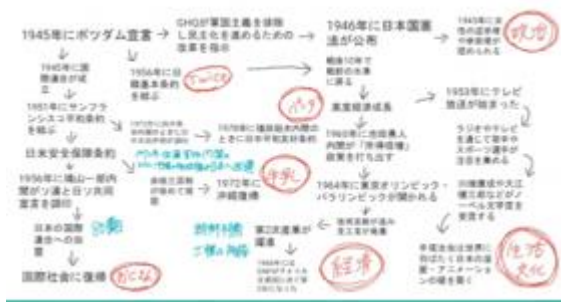
Ⅶ 結果と考察

1 結果

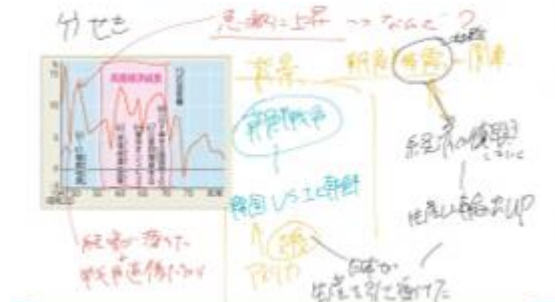
(1) 第1回検証授業

①まとめから見る個別最適な学びの効果

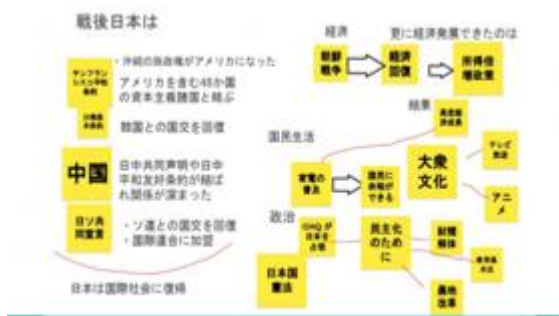
生徒 A



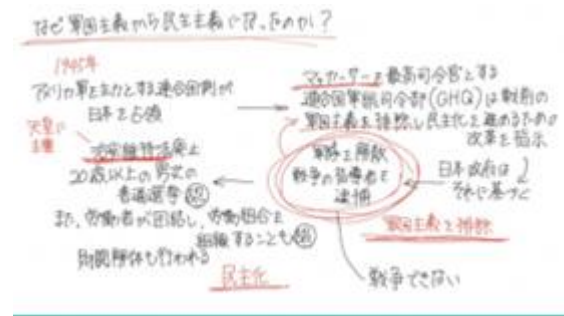
生徒 B



生徒 C



生徒 D



第1回検証授業の生徒のまとめである。4名の生徒のまとめを見ても分かる通り、一人一人が違うまとめ方をしている。この検証授業の活動は、個別最適な学びの視点の一つである「学習の個性化」を意識した進め方になっている。それぞれのまとめ方が異なっているのは、学習の形態や学習方法を生徒自身が選択し、自分に合った学習になるように活動を調整しながら進めた結果である。生徒のまとめからは、それぞれが自ら考えて主体的に活動していることが読み取れる。個別最適な学びが主体的な学びにつながる事が分かった。

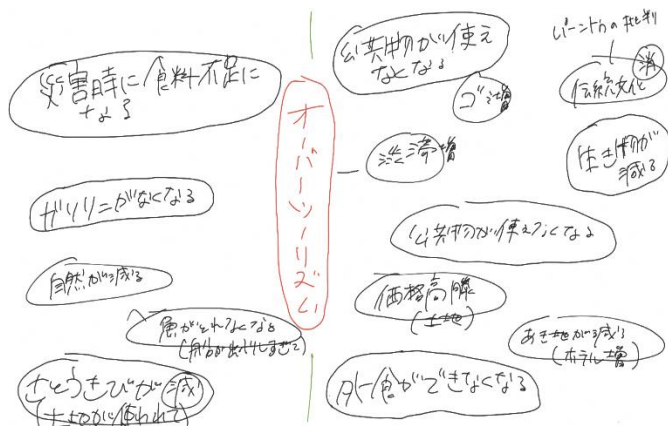
この検証授業では、社会を読み解く力の中でも特に、社会認識力（情報収集）と社会認識力（推論）が発揮されている。検証授業の活動によって、問いを解決するための情報を収集し、情報を関連付けて問いに迫るなかで社会を読み解く力が育成されたと推測できる。

①対話的な活動（話し合い）による深い学び

[illegible]

対話的な活動（話し合い）を取り入れたことで、自分なりの考えに「これで本当にいいだろうか。」という問いが生まれ、他者の考えから新たな価値や判断基準を得て、自分なりの考えを再構築していくことができていた。このことから、批判的思考力を働かせたことにより、社会判断力が高まったことが分かり、社会を読み解く力が育成できたと言える。

社会科では社会的事象の意味や意義を理解するだけにとどまらず、その果たしている役割や事象相互の結びつきなども視野に、社会的事象を様々な側面から捉え、考察する力の育成が求められている。第2回検証授業では、京都のオーバートゥリズム問題を解決するために政策を効率・公正の視点から主体的に考え、対話的な活動（話し合い）により、深い学びにつなげるこ



とができた。その中で、生徒は京都のオーバーツーリズム問題を考えいく過程で、オーバーツーリズム問題が宮古島でも起こりえる問題又は、すでに起こっている問題でもあると気づき始めた。すると、自発的に宮古島のオーバーツーリズム問題を考える生徒が出てきた。この授業を通して、京都と宮古島の共通点から視点を広げ、多面的・多角的に問題を捉えて考えることができていた。

(3) 第3回検証授業

①批判的思考力の高まり

第3回の検証授業では、基本的人権の尊重について自分なりの考えをまとめさせた。社会の中にある人権の対立について考えながら、どちらの人権が優先されるべきかを日本国憲法や法律を根拠にしながら自分なりの考えを記述していた。活動が続ける中で、今まで当たり前前に基本的人権を尊重することは大切だと分かっていたはずなのに、上手く言語化できないことや平等なはずの人権に優先順位をつけないといけないことに違和感を持つようになっていた。授業当初には基本的人権の尊重とは、「相手を思いやること。」「自分らしく生きること。」「相手が嫌な思いをしないこと。」などと考えていた生徒たちだが、「相手を思いやると自分らしく生きられない。」「自分らしく生きることで、相手に嫌な思いをさせてしまう。」ことに気づき、基本的人権を尊重することはどういうことだろうかと真剣に考え始めた。今までの自分の考えが、「本当に正しいのか。」「自分の判断で基本的人権は尊重されているのか。」と批判的思考力が十分に発揮され、生徒から新たな問いが生まれる場面が多い授業であった。

<批判的思考力が発揮された場面>

*基本的人権の尊重の対立

基本的人権を尊重するのは、とても難しいと考えた。

障害のため小学校5年生から車椅子生活を送っている中3のAさん。高校入試で上位の点数を取ったが、車椅子の生徒を受け入れる学校の設備が整っていないことや体調面が心配させるなどの理由で不合格となった。不合格はしょうがないのか？

Aさんも他の生徒と同じように頑張って上位の点数を取ったのに、体が不自由だからという理由で不合格は不平等

高校側からしたら、設備も整っていないし、合格させたところで、体調に何か問題が起きたら責任取れない。

尊重(=)の
関係に
ない

基本的人権は、本当に尊重されているのだろうか。

批判的思考力を働かせ、生徒が自ら問いを立てた

(4) 第4回検証授業

①社会を読み解く力を働かせ、未来を予測する

第4回検証授業では、宮古島の人口に着目し、出生数より死亡数の方が多いにも関わらず、移住者などにより人口が増加していることから、将来、宮古島にルーツを持つ宮古島出身者がいない宮古島になっていくであろうと予測できる。その原因として、宮古島で生まれ育った若者が宮古島に戻ってきていないことが挙げられる。実際に生徒にアンケートを実施した結果、宮古島に戻ってきたいと考えている生徒は4割弱であった。そのため、第4回検証授業では、どうすれば宮古島に戻って来たくなるのか考え、宮古島に必要な政策を自分なりに考える活動を行った。

まず、生徒たちは宮古島の課題を考え、若者が戻ってこない原因を探していった。次に、集めた課題に優先順位をつけ、どの課題を解決することが一番効果のあることなのかを判断し、政策を考えていく。そして、政策を考えていく中で、「この政策をやっても効果が薄いから別の政策が良い。」「予算が掛かりすぎるから、厳しいのではないか。」「観光客と地元住民どちらを優先してもデメリットがある。」など、自分の考えた政策の効果を予測しながら考えていた。そうすることで、新たな政策を立てるために情報収集をし、どうすれば効果が高い政策になるのかを判断し、自分の政策の効果を見直していく。まさに、社会を読み解く力がすべて発揮された授業であった。社会を読み解く力を発揮することで、予測できない未来のことを、多くの根拠を示しながらまとめることができていた。社会を読み解く力が、予測困難の社会を、自分らしく生きる力につながることを実感できる授業であった。

②単元を貫く問いが促す主体的な学び

単元を貫く問いを「正解」のない問いに設定したことにより、学力差に関係なく意見を言い合いながら、考えを深めていく場面が多く見られた。自然発生的に主体的な学びや協働的な学びが行われていたと言える。また、「正解」のない単元を貫く問いを設定することで、自分の考えに自信を持ってない生徒も、安心して学習に取り組むことができる学習環境を整えることができた。

2 考察

4回の検証授業を通して、生徒が社会を読み解く力を発揮している授業では、主体的な学びと協働的な学びが自然発生的に起きていた。つまり、主体的な学びと協働的な学びが社会を読み解く力を育成するために重要なポイントとなる。検証授業から、主体的な学びと協働的な学びを促すために必要不可欠な要素は次の2つだと考えられる。

第 1 回検証授業からも分かるように、生徒が自分のタイミングでやりたいように活動し、学びたいように学んでいく時間を増やすことが主体的な学びに大きく影響している。そのために、教師が発言する場面をできるだけ少なくし、生徒が活動時間を確保していくことが必要である。

ICTの活用で効果を感じたことは他者参照の効率化である。これまでの協働的な学びでは、他者の意見を聞いたり、他者に自分の分からないところを質問することが主流であったと思う。しかし、他者参照の質が大幅に上がったことにより、他者の思考の過程について、具体的な意見を述べながら質問をしたり、自分の考えとの違いを明確に説明しながら質問する様子が見られたことから、ICTを活用した他者参照は協働的な活動を促すだけでなく、生徒の問いを生み出し、発問の質を向上させていると言える。特に、figjamは他者参照が大きく簡略化され、生徒の主体的な学びと協働的な学びを促すだけでなく、教師が生徒全体を見取りやすくなり、生徒への支援の質も向上していくと考えられる。

研究内容でも述べたように、単元を貫く問いは「正解」ではなく、「最適解」「納得解」を求めるように設定することが重要である。下の figjam は第 4 回検証授業で生徒が考えをまとめたものである。「正解」のない問いを設定することで、多種多様な考えが出るだけでなく、自分の考えと他者の考えと比較することで、多面的・多角的に物事を捉え、新たな考えを生み出すことにつながったと考えられる。

16

指導助言をいただく中で、「正解」のない問いを「間違い」のない問いと言い換えることができるという言葉があった。生徒の意欲を更に高めることに適した言葉だと思う。つまり、「間違い」のない単元を貫く問いが生徒の主体的な学びと協働的な学びを促しながら、社会を読み解く力の育成に関わっていることが明らかであると言えるであろう。

VIII 成果と課題

1 成果

- (1) 単元を貫く問いの工夫や身近な事象を教材化できたため、授業を自分事として捉えて活動することで、主体的な学びにつながった。
- (2) 単元を貫く問いに対する自分なりの考えをまとめるために、批判的思考を繰り返しながら、生徒が自ら問いを生み出しながら学習に取り組むことができた。
- (3) 個別最適な学びにより、自分なりの考えを自分なりの表現方法でまとめることができていた。また、学習しやすい環境のため、粘り強く学習に取り組むことができた。
- (4) ICTを活用した他者参照の効率化により、支援を必要とする生徒や学力が低い生徒が他者の考えを参考にしながら、学習に取り組むことができた。
- (5) ICTを活用することで、協働的な学びが活性化し、生徒同士の対話がより具体的な内容に変化し、深い学びにつなげることができた。
- (6) 社会を読み解く力を発揮することで、未来を予測する場面においても、しっかりと根拠を示しながら考えをまとめることができた。

2 課題

- (1) 「間違い」のない単元を貫く問いの質を向上させていかなければならない。
- (2) 個別最適な学びを提供するための、単元計画・教材研究が複雑化し、教師一人のアイデアで乗り越えることは難しい。また、授業作りに時間がかかるため、時間確保が必要不可欠であるが、それ自体が厳しい状況である。
- (3) 机間指導の充実を図り、生徒への質問力・生徒を見取る観察力を向上させ、生徒の思考を促し、深い学びへと導く声かけが必要である。
- (4) 個別最適な学びを保証し、主体的な学びを進めるにあたり、どこまで支援をするのか、生徒に任せるのか線引きが難しい。
- (5) 生徒から情報や意見を引き出す力、生徒同士の意見をつなげる力、生徒に違和感を気づかせる力等のファシリテーターの役割が非常に難しい。

IX 参考文献

- 1 文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会科編』
東洋館出版社 2018 年
- 2 澤井 陽介・中田 正弘・加藤 寿朗・宗實 直樹
『これからの社会科教育はどうあるべきか』
東洋館出版社 2023 年
- 3 中西新太郎・谷口聡・世取山洋介
『教育 DX は何をもたらすのか「個別最適化」社会のゆくえ』
大月書店 2023 年
- 4 奈須正裕・伏木久始
『「個別最適な学び」と「協働的な学び」一体的な充実を目指して』
北大路書房 2023 年
- 5 堀田龍也
『個別最適な学びと協働的な学び』
さくら社 2024 年
- 6 山本崇雄
『なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか』
日経 BP 社 2016 年
- 7 中央教育審議会
『「令和の日本型教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）』 2021 年